第57号

発行日：平成23年6月16日
発行者：医学研究科広報委員会
印　刷：やまと印刷株式会社

弘前大学大学院医学研究科・医学部医学科広報紙

医学部ウォーカー

1面：医学研究科長・医学部長寄稿
2面：大学院の現状
3面：弘前大学を退職して
4面：ベスト研修医賞選考会
5面：研究室研修優秀発表賞
6面：研究室紹介　薬剤学講座
7面：人事異動
8面：臨床教授、診療教授等称号付与者

題字　弘前大学長　遠藤正彦氏筆

医学研究科長
医学部長寄稿

私たちにできること

医学研究科長・医学部長　佐藤　敬

今回の東日本大震災に関しては多くの事実が報道され、多くの人たちが多くのことを語ってこられましたが、ここでは改めて一つの事柄について再確認したいと思います。

弘前大学としては、DMATや医療チーム、被ばく状況調査チームなど多数の専門家を被災地に派遣し、これまでの教育研究の成果をいかんなく発揮してきました。また、人文学部学生を中心とした被災地でのボランティア活動も注目されています。加えて、教職員・学生が誰でもできることには皆で徹底して取り組まなければなりません。

これから夏に向けて予測される電力需給のアンバランスに対して、社会全体が節電に努める必要があります。これまでも、繰り返し節電と省エネルギーをお願いしてきました。しかし今回は、節電が私たちの持つべき理念である以上に、社会的義務であると認識する必要があります。震災の直後、既に私たちは、附属病院の緊急発電装置の機能を確保するために、意識的な省エネルギーに努めました。それを継続することは、暖房が不要になった今としては決して難しいことではないと思います。

もちろん私は、大学としての教育・研究活動が後退しないことを強く願っており、少なくとも現時点では、後退を目指すものではないことは確認しておかなければなりません。無駄な電力を確実にカットすることで対応できるのであれば、それが最も望ましいことであり、今回の不幸から導かれる私たちの理念を将来にわたって維持することにもつながります。大震災からの復旧・復興策は私たちの直接的努力で実現できないものが多いのは仕方がないとして、その目的に向けて誰でもできることは確実に実現していく必要があります。そのためには、今後更なる節電の必要も生じるかもしれませんが、いずれにしても、先ずは、私たちの普段の活動を見直し、無駄があったとしたら、それを排除することから始めなければなりません。そのことが、私たちの教育・研究活動を一層推進していくための必要条件です。

今年の入学式はいつもより簡素なものにならざるを得なかったことや、新年度の行事がさまざまな形で変更されたため、新入生はもちろん、多くの学生・教職員に予定外の対応をお願いすることになったと思います。そのことに感謝しながら、それにとどまらず、引き続き必要な身の回りの対応を真摯に果たすことが、私たちに求められていることを再確認したいと思います。

巻渕基金

第一回奨学生決定

分子病態病理学講座　教授　八木橋　操　六

大分以前のことになりますが、筆者の米国留学時代、医学部学生とも話をする機会にも恵まれました。彼らはよく勉強しており、アルバイトをしている学生は少なかったようです。またアルバイトをしている暇もないほど、医学科での授業スケジュールがハードのようにみえました。彼らの授業料は決して安くはなく、わが大学のものより遥かに高額であったと記憶しています。彼らがそこでなぜ勉学に集中できるかの理由のひとつに、米国大学での数多くの奨学金制度があります。余程の裕福な学生ではない限り、ほとんどすべての学生が何らかの奨学金を得ていたような印象を受けました。わが国では幸い、授業料が米国大学ほど高額ではなく、またアルバイトなどを続けながらでもなんとか医学部を卒業できる仕組みとなっています。

しかしながら、大学での研究を支える大学院生については、医師資格などない限り、なかなか通常の経済状態では進学できない状況となっています。今回、わが大学でも大学院生支援の奨学金制度が立ち上げられました。この大学院生支援奨学金制度とは、故巻渕秀夫先生（昭和五十四年本学卒）と御遺族の御遺志により二〇〇四年に創設された「巻渕基金」を基に、医師、歯科医師以外の医学研究科基礎系講座の入学生一人に対して入学金と最長三年分の授業料を全額支援する制度であります。とくに、記念すべき第一回奨学生に本講座に入学した稲葉　渉君が採用されました。今回、稲葉君が本制度の採用条件を満たす大学院生であったため、本制度の推薦に至りました。稲葉君には巻渕先生およびご遺族の御厚志をしっかりと受け止めて研究に邁進することを強く願っていますし、また、我々教室員一同も彼のこれからの研究生活を実りあるものにするために適切な指導と助言をしていきたいと考えております。このような、奨学金制度は、本学医学研究科では誠に画期的なものと思われ、これを基盤に本学での基礎的研究が大きく発展することを期待したいと思います。改めて、本制度の設立、そして奨学生決定にあたり、その奨学生推薦者として、故巻渕先生およびご遺族の方々や、この基金の創設に努力された諸兄へ深く御礼申し上げます。

巻渕基金

第一回大学院生支援制度に採用されて

分子病態病理学講座
博士課程一年　稲　葉　　渉

この度、幸運にも第一回大学院生支援制度に採用されました、分子病態病理学講座所属の稲葉　渉です。大学院支援制度とは、弘前大学を卒業された医師、故巻渕秀夫先生と御遺族の皆様の御遺志により二〇〇四年に創設された「巻渕基金」を基に、医師、歯科医師以外の医学研究科基礎系講座の入学生一人に対して入学金と三年分の授業料を全額支援する制度であります。今回の採用に際しまして、推薦者の分子病態病理学講座の八木橋操六教授、学務大学院担当の森　幸彦さん、また、採用して下さいました医学研究科学事委員長の若林孝一教授および関与された各先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

私は大学時代に臨床検査を専門にしていましたが、学部の卒業研究を機に病因の究明と診断法や治療法の開発に心惹かれて医学研究科進学を選択しました。医学研究を行う上で必要な病理学の知識や基本的な実験手法、また、科学的な思考方法や判断能力を身に付けるために本研究室で勉強させて頂いております。現在の研究テーマは、2型糖尿病の病因病態解析や治療法に関連した膵内分泌細胞の再生や増殖動態についてです。分子病態病理学講座は病理学教室でありますので、2型糖尿病の病態解析は、病理学的、形態学的な観点から解析も行っております。2型糖尿病の病理学的な解析は他の研究室にはないユニークな点であり、また、その研究成果も教室からの発表論文などから明らかであります。本研究室で一つでも多くの事を学び取れればと考えております。

ところで、社会・経済学者マックス・ウェーバーは、著書「職業としての学問」の中で、学問の意味や限界そして学者の姿勢について述べています。しかし、昨今の学問や研究の状況と対比すると、学問は成果、業績、競争そして資本主義の中に消え入った懐古趣味ではないかと思ってしまいます。それは、教科書の記述にどれだけ多くの研究者の努力と時間が費やされてきたか、学生や研究者ですら時に失念している状況にも現れていると思われます。どうやら、現代の研究は、社会に一早く繋がる結果が求められているようです。

社会の要請に対して私にできる事はまだまだ極少ないです。一方で、研究や教育の発展に寄与する事は重要であると考えていますし、同時に研究の重圧に耐えられるか常に不安を感じています。しかし、山のものとも海のものとも知らぬ者に私財を投じて頂きました巻渕先生と御家族の御意志を研究成果に繋げられるよう、私なりに精一杯努力してゆく所存であります。どうか御指導、御鞭撻の程宜しくお願い致します。

大学院の現状

学事委員長　若林孝一
（脳神経病理学講座　教授）

平成十九年四月に大学院医学研究科が部局化されてから四年が経過しました。この部局化は大学院の教育研究活動の比重が高まってきたことに対する措置でもありました。大学院のアクティビティーは多角的に評価されるべきですが、その重要な指標の一つに充足率があります。ここでは充足率に焦点を当て、大学院の現状について述べてみたいと思います。

（1）大学院の入学定員

医学研究科の入学定員は平成十八年度まで六十四名でしたが、保健学研究科博士後期課程に定員九名を振り替えたことにより平成十九年度から五十五名となりました。さらに、医学部医学科の入学定員が「経済財政改革の基本方針２００８」によって五名増加したことに伴い、大学院は五名減って、平成二十一年度から五十名となりました。したがって、現在の大学院の収容定員は、一年生から三年生が五十名、四年生が五十五名であり、合計すると二百五名となります。

図1　入学定員に対する充足率

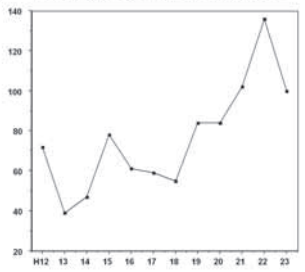
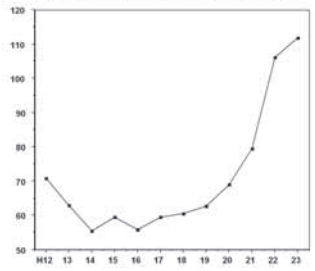


図2　収容定員に対する充足率



（2）大学院の充足率

図1は平成十二年度以降の入学定員に対する充足率を示したものです。入学定員に対する充足率は四十から八十パーセントの間を推移し、平均すると六十パーセント程度でしたが、十九年度と二十年度は八十四パーセントと上昇し、二十一年度以降の三年間は充足率百パーセントを達成しています。さらに、図2は大学院全体（一年生から四年生までの収容定員）に対する充足率を示したものです。ずっと六十パーセント前後を推移しておりましたが、ここ数年は上昇を示し、昨年度ついに百パーセントを達成しました。現在、収容定員二百五名に対し二百二十五名が在籍しており、充足率は百十パーセントです。今後は、この充足率を維持するとともに、大学院の実質化も進める必要があります。

（3）今後の課題

医学部医学科の入学定員が従来の百名から百二十五名に増加し、AO入試、青森県定着枠の新設などの入試改革も進められています。現在、百二十五名のうち六十名が定着枠となっています。大学院入試も例年三次募集まで行い、平成十九年度からは指導教授が許可した場合には臨床研修の二年目から大学院入学を認めることにしました。この制度を利用し、これまでに九名の研修医が大学院に入学しています（うち四名は学士編入学）。また、今年度から秋季入学もスタートします。大学院生の確保のためには、卒業後に本学あるいは青森県に残ってくれる学生を増やし、それによって大学院生ならびに指導教員が研究に専念できる時間的余裕を作ることが肝要と思われます。今後とも、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

平成22年度 医学科学位記伝達式

学務委員長　奥村　謙
（循環呼吸腎臓内科学講座　教授）

未曾有の東日本大震災の直後でもあり、平成二十二年度弘前大学卒業式は全学部で中止されることとなった。卒業生にとっては六年または四年間懸命に学んだ医学部最後の行事であり、また人生の節目ともなる記念すべき式典を祝うことができず、それぞれに寂しい想いであっただろう。そんな中、医学部医学科では、三月二十三日午後二時三〇分から、医学部コミュニケーションセンター大ホールにおいて、平成二十二年度学位記（医学士）伝達式が、遠藤正彦学長、石戸谷忻一鵬桜会理事長ご列席のもとで行われた。平成二十二年度医学科卒業生総数は九十名で、この中の十八名は制度開始後五回目となる三年次学士編入学生であった。

学位記伝達式では、最初に遠藤学長が卒業生代表の本郷恭子君に学位記を授与され、学長式辞を述べられた。震災直後であり、弘前大学学生およびご家族の中にも被災された方がおられ、卒業式中止を余儀なくされたことを説明され、社会に巣立つ卒業生には震災を乗り越え、社会に役立つような人材になるよう期待が込められた式辞であった。これに対し、本郷恭子君が代表して謝意とともに医師になる境地も含め、答辞を述べた。続いて佐藤敬医学部長から卒業生一人一人に対して学位記の伝達が粛々と行われた。各卒業生は、氏名が読み上げられる度に「はい」と大きく、そしてやや緊張したトーンで応え、ステージに上がると六年または四年間のハードな勉学をやり遂げた、爽やかな達成感を体一杯で表現していた。会場を埋め尽くした卒業生諸君に加えて、ご来賓の方々や教員も新たな門出の喜びを卒業生達と共有していた。伝達式の後半は、石戸谷忻一鵬桜会理事長からいつものユーモアを交えた同窓会のご紹介があった。例年の卒業式、学位記伝達式では、女子卒業生の華麗な袴姿、着物姿で厳かな中にも華やかな雰囲気が満ちるが、今回は自粛ムードのためか着物姿は少なく、やや寂しい伝達式となった。

学位記伝達式に続いて、コミュニケーションセンター一階で謝恩会が開催された。例年は夕刻から市内のホテルで開催され、華やかに着飾った卒業生と教師達が楽しく想い出

平成二十二年度　卒業生進路状況

副学務委員長　鬼島　宏
（病理生命科学講座　教授）

まず第百五回医師国家試験の結果について報告する。弘前大学の国家試験合格率は新卒九七・八％（八八／九〇）、全体九四・一％（九五／一〇一）と素晴らしい結果であり、新卒の医師国家試験合格率九五％以上という弘前大学の掲げる目標も達成できた次第である。全国平均の合格率［新卒九二・六％（七一五一／七七二三）、全体で八九・三％（七六八六／八六一一）］と比べて高い水準にあり、トップクラスの合格率で、卒業生の頑張りが実を結んだ形となった。

卒業生の地域別研修先（付表参照）は、青森県内が三十一名（三四・四％）であった。過去数年間の青森県内の推移は、三十五名（H19）、三十四名（H20）、四十名（H21）でありほぼ横ばいの傾向にある。一方、北海道・東北（青森を除く）が約二〇％、関東・東京が三五％、中部以西が一〇％であった。

青森県内のうち初年度に弘前大学医学部附属病院で研修する卒業生は、一昨年が十三名（プログラムA二名、B七名、C三名、D一名）、昨年が十一名（プログラムA二名、B三名、C五名、D一名）であったのに対して、今年が七名（プログラムA一名、B一名、C五名）と減少しており、憂慮すべき少なさであるには変わりはない。本学では、地域医療と連携するカリキュラムの導入など各診療科では工夫された卒後研修プログラムを組んでいる。弘前医療圏での活躍を期待するべく、二年後に第一線の医療現場での臨床研修を終了した今回の卒業生が一人でも多く、自らの医療・医学の素養を磨くために、後期研修で母校附属病院に戻る選択をしてほしい。

最後に卒業生の皆さんに一言、はなむけを。近年は、国家試験合格率のみならず、四年次共用試験（CBT、OSCE）結果や臨床研修における卒業生の活躍などで、全国的にも弘前大学医学部医学科の教育が高い評価を受けるようになっている。全国に広がり医の正道を歩む卒業生の諸君が、弘前大学卒業を誇りとし、さらなる研鑽を積まれ、医療・医学の各分野で活躍されることを心より期待している。

H19～H21卒業生進路状況

	H19年度卒業生進路		H20年度卒業生進路		H21年度卒業生進路		H22年度卒業生進路	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
青森県	35	34.3%	34	33.7%	40	41.2%	31	34.4%
北海道	8	7.8%	10	9.9%	6	6.2%	8	8.9%
東北（青森県以外）	13	12.7%	15	14.9%	14	14.4%	10	11.1%
関東（東京都以外）	11	10.8%	15	14.9%	14	14.4%	21	23.3%
東京	6	5.9%	9	8.9%	11	11.3%	9	10.0%
中部	11	10.8%	9	8.9%	2	2.1%	4	4.4%
近畿以西	10	9.8%	4	4.0%	5	5.2%	5	5.6%
不合格・その他	8	7.8%	5	5.0%	5	5.2%	2	2.2%
合計	102	100.0%	101	100.0%	97	100.0%	90	100.0%
国家試験合格者	101	99.0%	98	97.0%	92	94.8%	88	97.8%

弘前大学を退職して

財団法人　黎明郷
弘前脳卒中・リハビリテーションセンター　理事長　保嶋　実

平成二十三年三月三十一日付で弘前大学を退職し、四月一日から財団法人黎明郷（以下黎明郷）に勤務しております。定年までは一年を残しておりましたが、医学研究科では平成十三年度から任期制度が導入されて、今年度末は丁度十年の節目の年であり、予てからお誘いのあった黎明郷に教授会のご推薦の下お世話になることに致しました。些かの迷いと定年前に辞することの後ろめたさもありましたが、医学部臨床検査医学講座教授および附属病院検査部長就任時に掲げた目標を粗方達成したことを自分なりに評価し、決断致しました。

平成七年四月の弘前大学着任以来、臨床検査医学の教育および研究、さらには検査部の管理運営を通して、有為な医療人の養成や附属病院の診療の向上に微力を尽くしてまいりました。後年は病院長補佐、副病院長として附属病院の管理運営さらには教育研究評議員として大学の管理運営に手を染める機会にも恵まれました。この間は本来の教育や研究、そして検査部の管理運営の業務が等閑にされかねない状況にありましたが、臨床検査医学講座そして検査部の教職員の熱意と奮闘のもとに十分とまではいかないまでも、身の丈の業績を重ねることができたのではないかと考えております。同時に学内外の専門分野や業務を異にする教員や職員との交流を通じて、医学研究科、附属病院そして大学全体が擁する広範なダイナミズムを肌で感じ、また直面する役割や課題について理解することもできました。この期間は自身の大学での生活を締めくくる実り多い有意義な期間であったと実感しております。御高誼をいただいた関係の皆様方に重ねて感謝申し上げる次第であります。

遣り甲斐のある任務を与えられ、皆様の支えの中で務めを果たせた達成感と安堵感の真只中に今は在ります。退職前のこの数年間、すべての職を離れ、のんびり家族と過ごし、自由な時間を満喫することを夢見る気持ちとは裏腹に、医の道に細やかであっても生涯何らかの形で関わっていくことができればという思いも心の片隅に抱いておりました。新任地の黎明郷は弘前脳卒中・リハビリテーションセンター、介護老人保健施設つがる、そして碇ヶ関診療所を運営する総勢四百五十名を超える法人組織であります。四月一日から、従来からあった弘前脳卒中センターと黎明郷リハビリテーションセンターとを統合し、弘前脳卒中・リハビリテーションセンターとして新たなスタートを切ったところでもあります。

多くの方々のお世話で、十七年ぶりに再び脳卒中とリハビリテーション医療に直接関われる機会をいただきました。往時とはいかないまでも、年齢相応の体力そして気力はあると信じております。脳卒中特にリハビリテーション医療に初めて出会って感じたあのときめきを今一度感じることを楽しみに、ゆったりと任務に励んでいきたいと念じております。医学研究科、附属病院そして弘前大学の発展する姿を、離れることなく弘前の市内から間近に目にする幸運にも恵まれました。その姿を楽しみに、声援を送りながら過ごして行きたいと思っております。

入試専門委員会報告

平成23年度 AO及び前期日程入試を振り返って

医学科入試専門委員長　中根明夫
（感染生体防御学講座　教授）

東日本大震災で被災された方々はもちろんのことですが、間接的にもそれぞれの人が社会生活・個人生活にかなり影響されたこの春、新入生にとっても入学式が延期となり、例年より小規模ながら四月二十七日に無事入学式が挙行されました。昨年六月の二年次後期学士編入学第一次選抜試験に始まった平成二十三年度入試に関し、お忙しい中、試験監督や面接委員、出題委員、採点委員をしていただいた先生方および学務担当をはじめとした事務職員の方々に改めてお礼を申し上げます。

本学医学科においては前期日程の志願者倍率がこのところ高倍率を維持して来ましたが、平成二十三年度はさらに八〇〇名の志願者があり、志願者倍率が十二・三一倍となりました（表1）。この倍率は岐阜大学に続き、国立大学医学部医学科では第二位の数値です。そのため、予定していた基礎研究棟と臨床講義室では全受験生を収容できなくなり、急遽弘前高等学校のご厚意により、当高等学校に試験会場を変更しました。これはうれしい想定外の出来事でした。

実施三年目となるAO入試は、高校の要望により選抜試験日程を概ね一ヶ月早め、第一次選抜を平成二十二年十月二日・三日に行いました。「模擬講義に関する筆記試験」「個人面接」による評価を行い、受験者八十八名から八十名を合格者としました。第二次選抜は十一月七日に「ケーススタディの自学自習」「ワークショップ」による評価を行い、大学入試センター試験の結果（資格試験）を待って、最終的に四十名の合格者を決定しました。青森県が三十三名、北海道が三名、岩手県と秋田県がそれぞれ二名という結果でした。一方、前期日程の「青森県定着枠」は、定員十五名のところ一五七名の志願者となり、全体の倍率に連動し昨年より志願者が増加しました。

入学者の出身地域をみますと（表2）、今年は青森県出身者が昨年度の四十六名から四十名と減少しました。これは、昨年度に比べ、AO入試合格者の県内出身者が減少したことによるものです。しかし地域枠で入学した学生が累積増加していますので、将来が明るくなってきました。青森県出身入学者のうち三十三名がAO入試による入学者ですが、前期日程の入学者も昨年度と同様に七名と健闘しました。青森県に次ぐのは、東京都十二名、埼玉県七名、岩手県六名、北海道五名、千葉県、神奈川県、静岡県各四名となりました。

出身高等学校では、青森高等学校と弘前高等学校がともに十二名、八戸高等学校六名と続き、引き続き弘前・青森の二校の強さが発揮されました。一方、高等学校卒業後の期間に関しては、昨年度とほぼ同様でした（表3）。また、女子が三十四名となり、昨年度より増加しました。

昨年度から学士編入学が三年次から二年次後期になったために、選抜試験も新年度早々に開始され、六月五日に第一次選抜試験が行われます。最後に平成二十三・四年度の入学選抜試験の予定を表4としてお知らせいたします。年を追う毎に教員あたりの仕事量が増加していますが、入試業務は弘前大学の教員として根幹をなす仕事ですので、今年度も先生方のご協力をよろしくお願い申し上げます。

表1．志願者倍率（カッコ内は受験者倍率）

年度	推薦入試	AO入試	前期日程	後期日程	計
19	3.03 (3.03)	—	5.44 (4.56)	—	4.54 (3.99)
20	3.45 (3.45)	—	8.34 (7.18)	—	6.17 (5.52)
21	—	2.25 (2.25)	8.53 (7.22)	—	6.02 (5.22)
22	—	2.55 (2.55)	8.31 (7.08)	—	6.11 (5.32)
23	—	2.20 (2.20)	12.31(11.21)	—	8.46 (7.78)

募集人員：平成19年度は推薦入試30（うち青森県枠20）、前期日程50、後期日程は廃止となった。
平成20年度は臨時定員増10名があったため、推薦入試40（うち青森県内枠30）となった。平成21年度は推薦入試を廃止し、その定員をAO入試に移行し、すべて地域枠とした。また、新たな定員増10名は前期日程に青森県定着枠として設定した。この結果前期日程は60名となった。平成22年度は、さらに5名の定員増が認められたため、前期日程青森県定着枠に組み入れた。この結果前期日程は65（青森県定着枠15、一般枠50）となった。

表2．地域別入学者数

年度	青森県	東北5県	北海道	その他	計
19	22 (11/11)	14 (10/4)	6 (5/1)	38 (25/13)	80 (51/29)
20	39 (27/12)	13 (9/4)	5 (4/1)	33 (28/5)	90 (68/22)
21	42 (22/20)	12 (9/3)	8 (5/3)	38 (27/11)	100 (63/37)
22	46 (30/16)	14 (10/4)	5 (4/1)	40 (32/8)	105 (76/29)
23	40 (21/19)	13 (9/4)	5 (3/2)	47 (38/9)	105 (71/34)

カッコ内は男女比

表3．高校卒業後の期間別入学者数

年度	現役	1年	2年	3年以上	その他
19	37 (20/17)	20 (13/7)	12 (8/4)	11 (10/1)	0
20	50 (33/17)	16 (14/2)	5 (4/1)	18 (16/2)	1 (1/0)
21	41(21/20)	26 (18/8)	19 (13/6)	14 (11/3)	0
22	48 (30/18)	24 (19/5)	14 (13/1)	19 (14/5)	0
23	49 (30/19)	25 (19/6)	15 (9/6)	16 (13/3)	0

カッコ内は男女比

表4．平成23・24年度入試選抜試験日程

23年 6月 5日（日）	二年次後期学士編入学第一次選抜（学力試験）
23年 7月 2日（土） 7月 3日（日）	二年次後期学士編入学第二次選抜（学力試験、個人面接）
23年 10月 1日（土） 10月 2日（日）	AO入学第一次選抜（模擬講義試験、個人面接）
23年 11月 6日（日）	AO入学第二次選抜（ケーススタディの自学自習、ワークショップによる評価）
24年 1月14日（土） 1月15日（日）	大学入試センター試験
24年 2月25日（土） 2月26日（日）	前期日程選抜（学力試験） 前期日程選抜（集団面接、青森県定着枠個人面接）

平成22年度 ベスト研修医賞選考会

卒後臨床研修センター長　加藤　博之
（総合医学教育学講座　教授）

平成二十二年度ベスト研修医賞選考会が平成二十三年二月二十三日十八時より、医学部臨床小講義室で開催された。ベスト研修医賞は平成十六年度から始まった卒後臨床研修必修化に合わせて本学に創設された賞であり、今回で七回目を迎える。当日は、あらかじめ卒後臨床研修センター運営委員会により優秀研修医に選ばれた、大澤有姫先生（二年次）、冨田哲先生（二年次）、廣瀬勝己先生（二年次）（五十音順）の三名の研修医が、「ここがポイント！　研修医の心がけ」と題し、この一年間の研修生活の中で自分が重視してきたことについて、一人十分間ずつスピーチを行なった。聴衆は学生および教職員で、スピーチのあと参加した学生諸君（特にこの一年間臨床実習で研修医に間近に接してきた五年生が中心）による投票が行われ、廣瀬勝己先生が平成二十二年度ベスト研修医に選ばれた。引き続き弘仁会食堂にて表彰式が行われ、廣瀬先生に賞状、純銀製メダル、記念品が、次点となった大澤、冨田両先生には優秀研修医賞として賞状、楯、記念品が贈られた。その他にも各種特別賞として、今年度コメディカルスタッフから最も高い評価を受けた西崎公貴先生に「ベストパートナー賞」、研修医が提出すべき各種症例レポートを最も早く書き上げた廣瀬勝己先生に「レポート大賞」、この一年間の研修医向け各種セミナーの出席率が最高であった成田育代先生に「セミナー賞」が贈られた。さらに事務方からも、研修関係の事務手続きに今年最も迅速かつ正確に協力してくれた中田有紀先生に、感謝の意を込めて「グッドレスポンス賞」が贈られた。つづいて懇親会が行われたが、五年生から、恒例となった「ベスト指導医賞」の発表が本年も行われ、会場は大いに盛り上がった。教職員も多数の参加があり、教職員、研修医、学生がみな、この一年の研修や臨床実習の思い出について心ゆくまで語り合い、会は盛会裏に終了した。

ベスト研修医賞選考会で研修医の発表に聞き入る参加者たち。

花田病院長よりベスト研修医賞を贈呈される廣瀬勝己先生。

列を作ってベスト研修医賞の投票を行う学生諸君。

本学の「ベスト研修医賞」にはおそらく他施設・他学にはない本学独自のユニークな特徴がある。それは賞の最終選考を学生（特に五年生）が投票により行うことであり、このことは教育上大きな意味を持っている。そもそも研修医と五年次学生は立場の違いはあれ、約一年にわたり院内で同じ場を共有し、苦楽を共にしてきた間柄である。学生は、比較的年次が近く、それでいて確実に一日の長を有する先輩である研修医から多くを学び、学ぶ過程の交流を通じ、近い将来医師となる自分の姿に思いを馳せるであろう。研修医たちも自分が五年生のときには、当時の研修医から同様に多くを学んで育ってきたはずである。医師の育つ過程にはこのようなある種の〝伝統〟が不可欠であり、医師は〝人と人とのきずなの中でしか育たない〟と言えるのかもしれない。本賞がこれから卒前卒後に渡って連携する「屋根瓦式」教育を促進して、人と人とのきずなを強固なものとし、さらに本学の医学教育の〝伝統〟の厚みを増すために貢献してゆくことを期待したい。

花田病院長、佐藤医学研究科長と共に、ベスト研修医賞の廣瀬勝己先生（前列中央）、優秀研修医賞の冨田哲先生（同左）、大澤有姫先生（同右）。

ベスト研修医に贈呈されたメダル（純銀製）。

平成23年度 解剖体慰霊祭

生体構造医科学講座　准教授　外崎　敬和

平成二十三年度の弘前大学医学部解剖体慰霊祭は、弘前大学医学部及び附属病院において解剖にご遺体を捧げられました七十柱の御霊に弔意を捧げるため、五月十三日（金）午後一時半より、弘前市文化センター一階大ホールで挙行されました。慰霊祭にはご遺族、白菊会会員の皆様においでいただき、また、遠藤正彦学長はじめ各方面からご来賓をお迎えし、医学部医学科、保健学科の教職員および学生、総計約三百名が参列してしめやかに執り行われました。

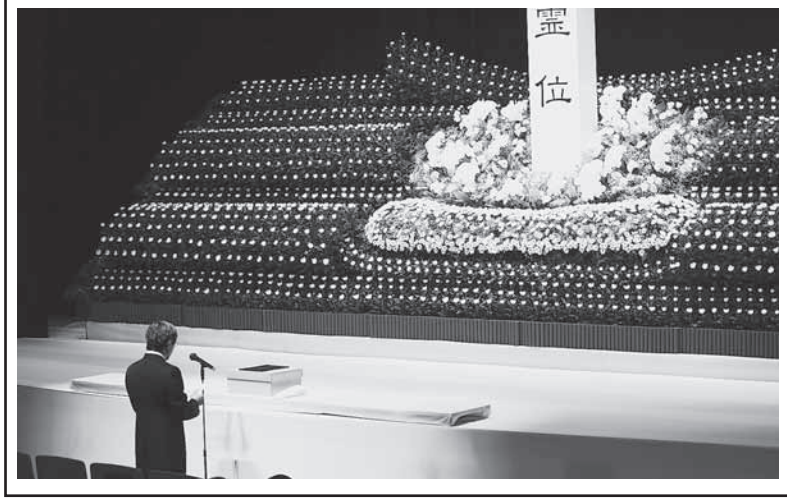
慰霊祭に先立ち、弘前大学医学部管弦楽団と創立五十周年記念アンサンブルによる慰霊のための楽奏が会場を包みました。全員による黙祷の後、昨年から本年の慰霊祭までに系統解剖、病理解剖、司法解剖の為にご遺体を捧げられた方々のご芳名が厳かに奉読されました。佐藤敬医学部長の祭詞に引き続き、学生代表（医学科三年松崎豊君）が弔辞を捧げました。代表献花（医学部長、花田勝美附属病院長、對馬均保健学科長、遠藤正彦学長、医学科三年小田敦子さん、保健学科三年古川愛美さん、奥田稔白菊会理事長）が行われた後、附属病院長が御礼のことばを述べられました。最後に参列者全員が献花をし、式は滞りなく終了いたしました。

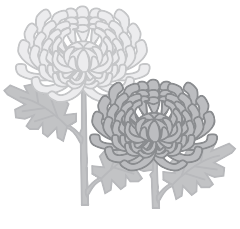
慰霊祭終了後、ご遺族、白菊会会員の方々、医学部教職員は弘前市墓地公園にある医学部納骨施設、埋骨施設に参拝し、献体者名簿を納め、献花をして黙祷を捧げました。

さて、解剖体慰霊祭のご報告に合わせて本稿をお借りして献体運動について一言お願いを申しあげたいと思います。

言うまでもなく、本学の医学教育研究はそのご芳名が慰霊施設に奉安された諸霊のご篤志、ご遺族のご理解ご協力によって支えられて参りました。しかし、昨今、本学の解剖学教育の根幹を支える解剖体の状況は厳しい環境にあります。近年、医学科学生の定員増、教育カリキュラム変更、保健学科の解剖学実習の実施等から、解剖体の不足が懸念されてまいりました。そして、本年十月からの解剖学実習では四人で一体の実習をせざるを得ない状況にあります。全国的には解剖学実習のためのご献体数は十分であります。しかし、本県本学では首都圏都市部と異なり、十分な解剖体の確保が難しいのが実情であります。関係各位が鋭意努力しておりますが、本県本学の困難な状況が社会的に十分理解されていないのも実情と思われます。

各位に於かれましては今後とも献体運動にご理解ご協力賜ります様宜しくお願い申し上げます。





研究室研修優秀発表賞について

脳神経病理学講座　教授　若林孝一

平成十八年度から研究室研修を三年次後期（火・水・木の午後）に行うことになり、五年が経過しました。さらに、平成十九年度からは発表会を行っています。今年は九十一名の学生（学士編入学を除く）が、三十三講座のいずれかにおいて十月から一月まで研修を行いました。

発表会は一月二十五日から二十七日の午後に基礎大講堂で行い、昨年と同様に優秀発表賞の審査も行いました。学生一人あたりの持ち時間を八分（発表五分、質疑応答三分）とし、各発表につき三名の教員が審査を行いました（各教員は約十名の審査を行う。二十七名に審査員を依頼）。審査は、①パワーポイントの内容（三十点）、②口演の態度（三十点）、③質問に対する答え方（三十点）を評価し、各教員は十演題の中から印象に残った発表を三つ選ぶ（ボーナス点を十点加算）という方法で行い、上位三名に優秀発表賞を贈呈しました。パワーポイントの作り方には慣れており、その内容は甲乙つけがたいものでした。一方、口演することには慣れていないせいか、かなり緊張した学生が見受けられました。さらに、審査員やフロアからの質問には、研修内容を理解し良く答えた学生から、ほとんど答えられなかった学生まで幅が見られました。

審査の結果、今回は以下の四演題が優秀発表賞に選ばれました（同点のため四題を選出。発表順。カッコ内は配属講座）。丸山尊「Epithelial mesenchymal transition in pancreatic cancer BxPC-3 cells」（病理生命科学）、佐藤くに恵「骨髄性プロトポルフィリン症の遺伝子診断」（皮膚科学）、田中景子「抗がん剤による末梢神経障害の評価法と牛車腎気丸の予防効果」（産科婦人科学）、佐々木瑛梨「てんかんモデル動物の行動解析」（脳神経生理学）。さらに、以下の五名は優秀発表賞に準ずる成績でした。水谷洋介（ゲノム生化学）、藤原大（社会医学）、佐々木都寛（神経精神医学）、茂木章一郎（小児科学）、野坂匡史（皮膚科学）（順番は発表順）。

優秀発表賞に選ばれた四名はどれもすばらしい発表で高得点を獲得しました。丸山君は英語での発表で、内容を含め完成度が高く、国際学会で発表できると思われました。佐藤さんは自ら遺伝子診断を行い、自分の言葉で落ち着いて発表していました。田中さんは結果が明快でわかりやすく、質問にも的確に答えていました。佐々木さんは発表内容が優れており、聴衆に伝わったことが受賞理由と思われます。なお、授賞式が五月二十三日に医学部長室で行われ、佐藤医学部長から四名の学生に優秀発表賞が贈呈されました（写真）。

最後に、四ヶ月にわたり学生を受け入れ指導していただいた担当教員ならびに今回審査を担当して下さった教員の方々に心より感謝申し上げます。なお、今年度は研究室研修は予定されておらず、来年度から四年次前期に行うことになります。その際、学士編入学生を含め百二十名以上の学生が対象となりますので、受け入れ講座ならびに受け入れ人数の増加がなければ対処できないと思われます。今後ともご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

チュートリアル ベストシナリオ賞贈呈式

脳神経生理学講座　教授　上野伸哉

平成二十二年度のPBLおよびチュートリアル授業で作成したベストシナリオ賞を決定しました。二年次PBLでは小川哲也、金吉秀、長沖隼英、三年次チュートリアルでは市川奈菜、島守佳菜子、田中景子の六名に決定しました。平成二十二年度は、カリキュラムへの移行年のため従来の三年次チュートリアル授業と新カリキュラムでは二年次へ移し名称も変更したPBL授業を二学年同時に進める必要がありました。多くの、教官の方々のご協力を得、無事に終了したことをここに深謝いたします。

今回は二年次と三年次の学生作成シナリオの比較ができる機会に恵まれました。

二年次シナリオは、全体的にはこなれていない部分もありましたが、シナリオネタとしては医学基礎系の話題から医療の社会的側面にかけてバラエティに富み、アイデアとしておもしろく感じられました。二年次は、臨床内容の講義が始まっていないのがかえってよかったのかもしれません。三年次のシナリオに関しては、全体的に、まとまっているものが多かったのですが、内容として疾患に関するものがほとんどで、ある意味似かよったものが多い印象でした。新カリキュラムにても二年次前期のPBL実習として継続していきますので、今後も力作を期待します。

平成23年度 SD章授与式

学務委員長　奥村謙（循環呼吸腎臓内科学講座　教授）

新年度が始まった平成二十三年四月一日、医学部基礎大講堂において新五年次学生に対するSD章（Student Doctor 章）授与式が行われた。加藤博之総合医学教育学講座教授の提案で平成十七年度より始められたSD章授与式は本年度で七回目を迎えた。臨床実習（BSL）開始前の儀式にも相当するこの授与式は、弘前大学医学部新年度ガイダンスの一環として定着したものと思われる。全員がBSLそのままの白衣姿で臨み、心体ともにBSLに向かう真摯な気持ちで満たされていた。SD章は臨床実習生の身分証であると同時に、四年次後期末に実施される全国共用試験（知識（CBT）と診療技能（OSCE）を問う試験）に合格した証明でもある。同時に医療人としての認識を新たにさせる標しでもある。SD章授与式の目的を理解し、臨床実習生の誓いの言葉を胸に刻み、五年次BSL、六年次クリニカルクラークシップに臨んで欲しいと思う。

授与式では佐藤敬医学部長と筆者（学務委員長）の挨拶と祝辞、花田勝美附属病院長の訓辞の後、五年次学生代表の田中弘子君に病院長よりSD章が授与された。式には学生が共用試験（OSCE）でお世話になった模擬患者（SP）の方々も参加され、SD章の授与を見守っていただいた。続いて田中君が以下の「弘前大学医学部臨床実習生の誓い」を宣誓した。

「弘前大学医学部臨床実習生の誓い」

臨床実習生の一人として医療の現場に参加するに際し、

1. 私は、人類への奉仕に自分の人生を捧げることを誓います。

2. 私は、学び得た医学知識をもとに、良心と尊厳をもって医学の務めを果たします。

3. 私は、生命の始まりから人命を最大限に尊重し続けます。また、人間性の法理に反して医学の知識を用いることはしません。

4. 私は、患者の健康を私の第一の関心事とします。

5. 私は、私への信頼のゆえに知り得た患者の秘密を、たとえその死後においても尊重します。

6. 私は、私を教え導く人々に尊厳と感謝の念を捧げます。

7. 私は、私の自由意志に基づき名誉にかけてこれらのことを厳粛に誓います。

これらの誓いは臨床実習のみでなく、卒業後も医師として生涯遵守すべきものである。同時に医学医療のあるべき姿も教示している。心に深く留め、良医を目指して努力されることを期待したい。

平成23年度 動物慰霊祭開催される

附属動物実験施設長　中根明夫
（感染生体防御学講座　教授）

去る五月十九日医学部基礎講堂において、遠藤正彦学長をはじめとして、多数の教員および大学院・学部学生のご臨席のもと、平成二十三年度動物慰霊祭が行われました。慰霊祭では、まず佐藤　敬医学研究科長から祭詞をいただきました。続いて、出席者による献花が行われ、厳かな中で慰霊祭に引き続き記念講演が行われました。本年は脳神経生理学講座上野伸哉教授に「心の遺伝子リポジトリ形成―遺伝子改変動物を用いた行動の分子機構解明に向けて―」と題する講演をいただきました。概算要求で平成二十一年から開始された「心の遺伝子リポジトリ形成」プロジェクトの成果の一部を分かりやすく概説いただき、改めて解析手段のツールとしての遺伝子改変動物の威力を強く感じさせる講演でした。今回の慰霊祭は例年にも増して教職員の参加者が多く、心より感謝しております。また、その後の動物慰霊碑の参拝には、昨年同様二年次学生全員が来たことは動物実験施設としても嬉しい限りです。

さて、この紙面を借りて、動物実験施設のこの一年の活動について記載します。上野教授にご講演をいただいた「心の遺伝子リポジトリ形成」プロジェクト及び佐藤医学研究科長のご尽力で予算をいただき、遺伝子改変動物のための実験室の拡充工事が行われ、二年間の動物実験施設充実のための工事が完成いたしました。また、昨年度導入されたマーモセットの繁殖を行っており、概ね順調に頭数が増えています。マーモセットの使用をお考えの先生にはもう少し先に提供が可能となると考えています。さらに、遺伝子改変動物の受精卵凍結保存についても現在準備が進んでおり、ここ一・二年でご希望の先生方に対応出来るようにしたいと考えています。

去る三月十一日に発生した東日本大震災及び四月七日の余震による大規模停電では、動物逃亡等の事故を未然に防ぐ目的で、先生方には一時動物実験施設への入館及び動物実験を控えていただく措置を取らせていただきました。自家発電装置はあるものの小型のため、充分に停電に対応出来ないこともあり、今後課題となっています。動物実験施設としては、動物実験を用いた研究の発展のためさらに改善を加えていきますので、今後とも動物実験施設に対するご理解とご支援をお願いいたします。

研究室紹介

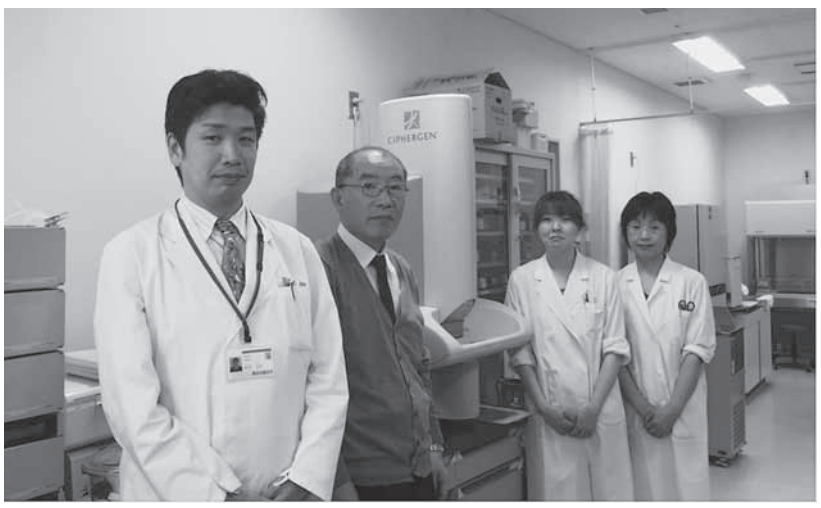
薬剤学講座

薬剤学講座　教授　早狩　誠

「薬剤学講座」に所属するスタッフは、厳密に言えば教授一名、事務職員一名、「がんプロフェッショナル養成プラン：抗がん剤感受性試験」担当技能補佐員一名、そして大学院生（薬剤師）四名、計七名ですが、強力な研究スタッフとして昨年四月板垣史郎准教授が北海道大学薬学部より着任しました。豊富な研究経歴を有することから、薬剤部ばかりではなく薬剤学講座の研究の推進にも貢献してくれるものと大きな期待を寄せております。

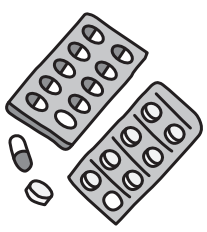
過去に薬剤部には医薬品試験室がありました。ここでは医薬品の適正使用に向け、既存の測定法が開発されていない薬物の血中濃度測定を行っておりました。しかしながら、人員や分析機器の不足からこの業務は中断しておりましたが、一昨年高感度で自動測定可能なＨＰＬＣ装置を導入していただきました。患者への安全・適切・有効な薬物療法が求められている昨今、薬剤師の重要な業務である薬剤管理指導業務に、このＨＰＬＣが大きく貢献できるものと期待をしています。

現在、薬剤学講座（部）で四名の大学院生は、1）アンジオテンシン変換酵素（ＡＣＥ）阻害剤の生理機能への影響、2）抗がん剤感受性試験にて陰性を示したケースにおける作用機序の解析、3）ラット化学発癌過程において特異的に出現するタンパク質の構造解析等について研究を行っています。



中枢移行性ＡＣＥ阻害剤による記憶消失の予防効果が二〇〇七年そして二〇〇九年に報告されました。そこで中枢移行性ＡＣＥ阻害剤カプトプリル、非移行性ＡＣＥ阻害剤イミダプリル、そしてＡＣＥ以外のレニン・アンジオテンシン系抑制剤ロサルタンを用い、モーリス水迷路法にて記憶保持能への影響を解析した結果、カプトプリルが特異的に記憶保持能を改善しました。また、これらのラット脳からペプチド分画を調整し、SELDI-TOF MS にて発現変化するペプチドのスクリーニングを行ったところ、カプトプリル投与群で有意に発現変化する数多くのペプチドを見出すことができました。現在これらのペプチドの構造解析が進行中です。これらのペプチドの中で記憶保持機構を調節するペプチドが明らかになれば、アルツハイマー病の治療薬の開発に繋がるかもしれないとの「野心」を抱きながら研究を進めています。

さらに日常業務から得た様々なエビデンスは、院内ばかりではなく全国の病院薬剤師にとっても有力な情報となることから、積極的に論文を作成し情報の共有化に努めています。また奨励研究にも応募し平成二十三年度は二件が採用されました。今後とも薬剤学講座（部）へのご支援ならびにご指導を宜しくお願い申し上げます。



コラム

医学部こぼれ話…

弘前大学も今年度の授業開始は、ほぼ一ヶ月遅れで連休明けの五月九日からとなった。

地震当日、九州に住む両親に無事を伝えるための災害伝言板を使おうとしたら、弘前は被災地ではありませんとの主旨のメッセージが流れる。確かに、停電、ガソリン不足になったが、建物がひどくこわれたりはなかったし、青森での空気放射線量も異常値を示すこともなかったから当然？被災地ではなくても、三月終わりは移動の時期。日本海側の輸送能力は低く、ガソリンも不足し、学生、卒業生の引っ越しは予定がたたず、なくなく弘前で持ち物全処分しての引っ越しの卒業生も多くいたようである。その後、九州の友人と連絡する機会があったが、東と違い西は明るい。日本の広さと東北の今の重苦しさをなおさら感じる現在である。

第13回 弘前国際医学フォーラム学術集会 開催のお知らせ

泌尿器科学講座　教授　大山　力

弘前国際医学フォーラム第十三回学術集会を開催いたします。

日時：平成二十三年九月九日（金）

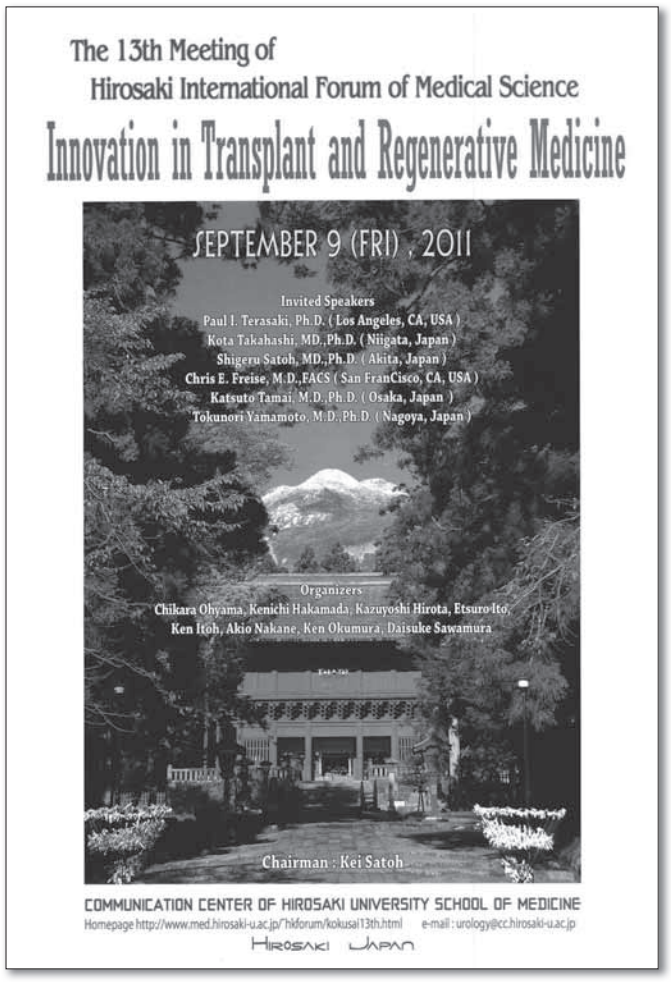
場所：医学部コミュニケーションセンター

今回のテーマは、"Innovation in Transplant and Regenerative Medicine"とし、近年著しい進歩を遂げている移植再生医療の最先端の話題を取り上げ、現時点での問題点を探るとともに、更なる発展を目指して討議を展開します。

移植免疫の世界的オピニオンリーダーであるPaul I. Terasaki教授（Terasaki Foundation Laboratory, USA）、ABO血液型不適合腎移植のパイオニアである高橋公太教授（新潟大学）を始め、国内外から六名の第一線でご活躍中の先生方をお招きして講演して頂きます。

ポスターセッションも予定しておりますので、皆さま是非ご参加ください。

学会サイト
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/~hkforum/kokusai13th.html



人事異動

●大学院医学研究科

昇任（23・3・1）
腫瘍内科学講座　准教授　伊東　重豪〈腫瘍内科学講座講師〉

復職（23・3・13）
医学医療情報学講座　助教　松坂　方士

任期満了（23・3・13）
医学医療情報学講座　助手　津谷　亮佑

復職（23・3・22）
腫瘍内科学講座　助教　高畑　武功

辞職（23・3・31）
地域医療学講座　講師　吉村　徹郎〈青森市民病院〉

神経精神医学講座　助教　松岡　貴志〈福島県太陽の国病院〉
消化器血液内科学講座　助教　平賀　典子〈弘前市立病院〉
循環呼吸腎臓内科学講座　助教　櫛引　基〈むつ総合病院〉
整形外科学講座　助教　沼沢　拓也〈公立野辺地病院〉
耳鼻咽喉科学講座　助教　井上　卓〈青森県立中央病院〉
産科婦人科学講座　助教　山本　善光〈箕面市立病院〉
歯科口腔外科学講座　助教　成田　憲司
先進移植再生医学講座　助手　今西　賢悟〈財）鷹揚郷弘前病院〉
地域医療学講座　助手　松本　敦史〈八戸市立市民病院〉
循環呼吸腎臓内科学講座　助手　村上　和男〈むつ総合病院〉

任期満了（23・3・31）
形成外科学講座　教授　澤田　幸正
臨床検査医学講座　教授　保嶋　実〈（財）黎明郷〉

採用（23・4・1）
法医学講座　助教　阪本奈美子〈（独）東京医療センター〉
先進移植再生医学講座　助教　米山　徹〈奨励研究員〉
地域医療学講座　助教　森山　貴子〈八戸市立市民病院〉
循環呼吸腎臓内科学講座　助教　木村　正臣
神経精神医学講座　助教　菅原　典夫〈（財）愛成会弘前病院〉
整形外科学講座　助教　田中　利弘〈（医）整友会弘前記念病院〉
耳鼻咽喉科学講座　助教　高畑　淳子
産科婦人科学講座　助教　重藤龍比古〈むつ総合病院〉
歯科口腔外科学講座　助教　中川　祥〈医員〉
病理生命科学講座　助手　清野　浩子〈医員〉
糖鎖工学講座　助手　石岡　陽菜
循環呼吸腎臓内科学講座　助手　佐々木憲一〈（社）明和会中通総合病院〉
循環呼吸腎臓内科学講座　助手　鈴木　晃子〈三沢市立三沢病院〉

昇任（23・4・1）
心臓血管病先進治療学講座　准教授　樋熊　拓未〈循環呼吸腎臓内科学講座講師〉
脳神経内科学講座　助教　若佐谷保仁〈神経内科助手〉
皮膚科学講座　助教　是川あゆ美〈皮膚科学講座助手〉

配置換（23・4・1）
先進移植再生医学講座　助教　畠山　真吾〈泌尿器科助教〉
消化器血液内科学講座　助教　櫻庭美耶子〈消化器内科・血液内科・膠原病内科助教〉
消化器血液内科学講座　助教　澤谷　学〈高度救命救急センター助教〉
消化器外科学講座　助教　坂本　義之〈高度救命救急センター助教〉
消化器外科学講座　助教　工藤　大輔〈高度救命救急センター助教〉
産科婦人科学講座　助教　阿部　和弘〈産科婦人科助教〉
救急・災害医学講座　助教　大和田真玄〈循環器内科・呼吸器内科・腎臓内科助教〉

勤務配置異動（23・4・1）
地域医療学講座　助教　花畑　憲洋〈消化器血液内科学講座助教〉

採用（23・5・1）
整形外科学講座　助教　岸谷　正樹〈医員〉

昇任（23・5・1）
産科婦人科学講座　准教授　横山　良仁〈産科婦人科学講座講師〉

●附属病院

配置換（23・3・1）
循環器内科・呼吸器内科・腎臓内科　助教　山田　雅大〈病態薬理学講座助教〉
循環器内科・呼吸器内科・腎臓内科　助教　當麻　景章〈検査部助教〉

辞職（23・3・31）
周産母子センター　准教授　尾崎　浩士〈国立病院機構弘前病院〉
眼科　講師　目時　友美〈大館市立総合病院〉
内分泌内科・糖尿病代謝内科・感染症科　助教　松橋　有紀〈板柳中央病院〉
神経科精神科　助手　佐々木全英〈五所川原市立西北中央病院〉
消化器外科・乳腺外科・甲状腺外科　助教　丸山　将輝〈公立金木病院〉
整形外科　助教　山﨑　義人〈秋田社会保険病院〉
高度救命救急センター　助手　境　雄大〈青森労災病院〉
皮膚科　助手　六戸　大樹〈青森県立中央病院〉

採用（23・4・1）
消化器内科・血液内科・膠原病内科　助教　三上健一郎〈東海大学〉
内分泌内科・糖尿病代謝内科・感染症科　助教　柳町　幸〈板柳中央病院〉
神経科精神科　助教　田中　治〈琉球大学〉
消化器外科・乳腺外科・甲状腺外科　助教　石澤　義也〈三沢市立三沢病院〉
皮膚科　助教　赤坂英二郎〈青森県立中央病院〉
泌尿器科　助教　石村　大史〈大館市立総合病院〉
放射線科　助教　対馬　史泰〈青森県立中央病院〉
高度救命救急センター　助教　横山　公章〈大館市立総合病院〉
眼科　助手　木村　智美〈大館市立総合病院〉
高度救命救急センター　助手　江濱　由松〈市立函館病院〉
高度救命救急センター　助手　澤田　直也〈弘前市立病院〉

昇任（23・4・1）
眼科　講師　宮川　靖博〈眼科助教〉
麻酔科　助教　工藤　隆司〈麻酔科助手〉

配置換（23・4・1）
循環器内科・呼吸器内科・腎臓内科　助教　越前　崇〈高度救命救急センター助教〉
呼吸器外科・心臓血管外科　助教　渡辺　健一〈高度救命救急センター助教〉
整形外科　助教　大石　裕誉〈高度救命救急センター助教〉
高度救命救急センター　助教　工藤香名江〈脳神経外科助教〉
高度救命救急センター　助教　木村　憲央〈消化器外科学講座助教〉
高度救命救急センター　助教　諸橋　一〈消化器外科学講座助教〉
呼吸器外科・心臓血管外科　助教　青木　哉志〈胸部心臓血管外科学講座助教〉

辞職（23・4・30）
リハビリテーション部　助教　岩崎　弘英〈青森市民病院〉
泌尿器科　助手　杉山　尚樹〈（財）鷹揚郷青森病院〉
泌尿器科　助手　得居　範子〈（財）鷹揚郷青森病院〉

採用（23・5・1）
泌尿器科　助手　岡本　哲平〈（財）鷹揚郷青森病院〉
泌尿器科　助手　鈴木裕一朗〈（財）鷹揚郷青森病院〉
産科婦人科　助手　福山　麻美〈医員〉

昇任（23・5・1）
周産母子センター　准教授　樋口　毅〈産科婦人科講師〉
産科婦人科　講師　福井　淳史〈産科婦人科助教〉

配置換（23・5・1）
リハビリテーション部　助教　鈴木　雅博〈整形外科学講座助教〉

弘前大学医学部 臨床教授・臨床准教授 新規称号付与者

臨床教授

田中　正則（弘前市立病院医療局長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

東野　博（弘前市立病院副院長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

栗林　理人（青森県立つくしが丘病院診療部長　児童・青年期診療科部長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

高橋　賢二（青森市民病院心臓血管外科部長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

横山　昌樹（国立病院機関弘前病院外科医長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

小松　尚（青森県立中央病院リハビリテーション部部長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

尾崎　浩士（国立病院機関弘前病院産婦人科部長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

原　信哉（五所川原市立西北中央病院眼科部長）
平成二十三年五月一日～平成二十六年四月三十日

臨床准教授

坂本　卓子（五所川原市立西北中央病院精神神経科科長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

庭山　英俊（むつ総合病院メンタルヘルス科部長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

佐藤　澄人（五所川原市立西北中央病院小児科科長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

佐藤　工（国立病院機関弘前病院小児科）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

棟方　正樹（三沢市立三沢病院医療局長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

秋山　昌希（外ヶ浜中央病院院長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

中島　道子（公立野辺地病院副院長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

小沼　譲（大館市立総合病院第二内科部長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

沼尾　宏（青森県立中央病院消化器内科・腫瘍内科部長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

久保　恒明（青森県立中央病院血液内科部長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

平尾　良範（黒石市国民健康保険黒石病院外科部長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

伊藤　千春（黒石市国民健康保険黒石病院眼科医長）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

診療教授等新規称号付与者

診療教授

松原　悦朗（脳神経内科学講座准教授）
平成二十三年三月一日～平成二十六年二月二十八日

診療講師

菊地　隆（神経精神医学講座助教）
平成二十三年四月一日～平成二十六年三月三十一日

お知らせ

医学部ウォーカーへ教授就任のご挨拶を掲載いただける方は、弘前大学医学研究科総務グループ（総務担当）までご連絡願います(0172-39-5194)。ただし、紙面の都合により掲載ができない場合もございますので、あらかじめご了承願います。

編集後記

やはり、今回は東日本大震災に触れなければならないと思います。

三月十一日二時四十六分にドカーン。ちょうど、臨床研究棟の二階の部屋で講演のスライドを作っているところでしたが、かなり長期に大きな横揺れを感じました。私は古い世代ですので、高校の理科では、物、化、生、地をすべて習いました。地学では地震は頻出の問題で、横揺れが強い場合震源地は比較的遠いと記憶しておりますので、直下型ではなく日本海沖ぐらいかなとその時思いました。というのも、昭和五十八年に能代沖で起こった日本海中部地震を経験していましたが、それと同じぐらいの感じでした。揺れが落ち着いてから廊下にでると、みんな出てきていました。一人が携帯をみて、震源地は宮城県沖と言いましたので、弘前でこれぐらい揺れるのだから、相当でかい地震だと思ったのを記憶しています。気がついたときには電源が落ちました。

その日は、教室の学位記のお祝いをする予定でしたが、弘前は停電でしたので中止として六時には家に戻りました。家に帰って非常に困ったのが、水でした。家はマンションで水を電気で組み上げていますので、断水となっていました。電気がないと、照明、テレビ、料理、風呂、便所、すべてダメでした。結局二十四時間で電気が復旧しましたが、なんてったって、便所を流せないのが参りました。本当に、現代社会の電気への依存度の高さを再確認した大震災でした。親戚が仙台にいて、幸いけがなどはなかったですが、やはり、電気や水で苦労したと聞きました。

その後の食糧不足、水不足、ガソリン不足は今考えると、いわゆるモノ不足への不安、パニック現象で、恥ずかしながら、自分でもスーパーに行って缶詰やカップヌードルをたくさん買ったり、車のガソリンが二十％ぐらい減っても並んで給油していました。みんながそれをやれば、物がなくなりますし、ガソリンスタンドは混みます。危険なことですが、ガソリンを石油のポリタンクに入れている人を見て、おれもやろうかと思いました。今になると、反省し苦笑してしまいます。

大震災から、すでに三カ月になろうとしていますが、いまだに被災地では、電気や水道が復旧していないところもあり、御苦労も多いと思います。今回は、原発の問題は触れませんでしたが、まだ一年ぐらいかかりそうですね。私自身も、できる限り、東北地方の復興に少しでも貢献していきたいと思っています。

（澤村　記）

弘前大学 後援会のご案内

会長　石戸谷忻一

弘前大学後援会では、学生の学業、課外活動への助成、学生の進路指導に必要な助成等学生生活の多岐にわたる分野の助成を行っております。つきましては、何卒本会の趣旨に御賛同頂きまして、各位の格別の御高配、御支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

なお、入会方法等の詳細については、弘前大学総務部総務課広報・支援グループ（Tel:0172-39-3012、E-mail:jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp）までご連絡いただくか、弘前大学後援会ホームページ（http://www.hirosaki-u.ac.jp/kouen/index.html）をご覧ください。

社団法人　青森医学振興会

沿　革　平成11年3月1日　弘前大学医学部医学科後援会鵬桜医学振興会発足（任意団体）
平成13年4月2日　社団法人青森医学振興会設立許可（青森県）

振興会では、21世紀の青森県の医学・医療を積極的に支援しようと次の事業を行っております。

- ○ 医学教育の助成　教育活動を活性化するための支援
- ○ 医学研究の助成　研究活動を高度化するための支援
- ○ 地域医療振興事業の助成　地域医療に貢献するための支援
- ○ 医学国際交流の助成　国際学術交流の支援

随時、会員の募集とご寄附の受付をしております。
会費と寄附金の納入方法は下記の通りです。

口座名	社団法人 青森医学振興会			
口　座	青森銀行	弘前支店	普通　1087485	※　各銀行の本支店及びゆうちょ銀行から振込む場合は、手数料無料です。
	みちのく銀行	大学病院前支店	普通　0198579	
	ゆうちょ銀行振替（旧 郵便振替）		02200－4－57580	
会　費	会員種別	年会費	お振り込みいただく場合は、お手数ですが、振興会事務局までご連絡（電話、メール）願います。	
	医学部教員	1万円		
	医学部卒業生	2万円		
	賛同する個人	1万円		
	賛同する団体	10万円		

お問い合わせ　TEL：0172（33）5111内線6519　E-mail：jm6519@cc.hirosaki-u.ac.jp